

# こころの玉手箱

文化人類学者  
須藤 健一

5

「今度生まれてくる子にスドーの名前を付けてよいか」

フィールドワークで幾度も訪れた南太平洋のトンガ王国で、ある男性からこんな依頼を受けた。1994年の調査を終え、帰国する直前のことだ。

トンガ社会では、名付け親になるのは名譽なこと。そもそも、これに先立ち、私自身、この男性とは義理の兄弟になっている。というのも調査で世話になった村長に「わが養子になれ」と請われ、快諾していたからだ。

村長には11人の子があり、男性はその四男だった。あるとき、スドー君がい



たくましく成長したスドー君④とニチ君⑤

じめられていたという風聞が舞い込んだ。はじめの理由は、「妙な名前だから」という。

トンガの「スドー」君

## 絆重んじる国で名付け親に

はクリスチャン・ネームの現地読みのシオネ(シオン)やトマシ(トーマス)などが一般的。そんななか、スドー君ニチは際だって異風の響きがある。

「日本の大学のプロフェッサーの名前なんだぞ」と言い張っても、子どものいじめやからかいは、そもそも理非と別次元の沙汰。自分の名前が原因でいじめに遭っていることに、こちらも胸が痛んだ。

そのスドー君ニチ君と、2006年に初めて会った。中学生になっていた彼は、引っ込み思案なところがあつたが、成績は優秀だという。いまは高校生で、ラグビーに熱中している。トンガに4年制の大学はないので、日本かニュージーランドに留学したいと夢をみている。もし日本の大学に入学したら、面倒をみてあげたい。

来週はシンガー・ソングライターの杉田二郎氏です。